

國學院大學學術情報リポジトリ

与論島のシニユグ祭りの変遷：
ニッチェーサアクラを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 源, 園生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001601

与論島のシニユグ祭りの変遷

—ニッチェーサアクラを中心に—

The History of the Shinyugu Festival in Yoron Island:
Focus on Nichee-Saakura

源 園生

キーワード：与論島 琉球 沖縄 農耕儀礼 祭りの変遷変容
关键词：与论岛 琉球 沖縄 農耕儀礼 祭祀的变迁与变容

要旨

与論島は、九州の南端佐多岬から台湾までの、およそ1200kmに連なる島々の中央に位置し、珊瑚礁のリーフに囲まれた周囲24kmの小さな平坦な島である。島名が文献上で確認できるのは、1424年から1867年の琉球王国の中国との外交記録公文書『歴代宝案』および、朝鮮王の命に奉じた1471年発行の申叔舟「琉球國之図」『海東諸国紀』である。このことより、与論島は15世紀初頭には琉球国の海外交易の道標として知られていたといえよう。

この島で古くから行われている「シニユグ祭り」は、遠い昔、北から南から、さまざまな目的をもってやってきた同族ごとの祭りとされ、始祖の移動経路と伝わる「神道（かみみち）」と「構成員」と「祭場」を分析することにより、与論島の社会の成り立ち、すなわち「島建て」がわかるとされる。しかしながら、自然災害や、国政や、生活様式の変化などにより、祭りは大きく変遷してきた。本稿では、祭りが本格的に調査された1957年から60年を経た2017年までの変容を、現地調査および先行研究を基に比較を通して考察していく。

摘要

与论岛是一个四面环绕珊瑚礁，海岸长24公里的平坦岛屿。位于从九州南端的左多岬和台湾之间，约1200公里群岛的中央。1424年到1867年之间的琉球王国与中国外交记录公文《歴代宝案》，以及奉朝鲜王的命令申叔舟于1471年发行的《东海诸国记》中的《琉球国之图》等文献中可以确认，与论岛的这个岛名。也可以从中说，与论岛从十五世纪初便是琉球王国的海外贸易的地标了。

与论岛从古代一直举行的“シニユグ祭祀”是纪念祖先以前，从琉球的东南西北，抱着各种目的，终于到达这里而举行的庆祝活动。通过分析始祖移动的路径的“神道”和“构成祭祀的人员”和“祭祀的场所”可以得知与论岛社会关系的成立经过，既可以了解“建岛”的过程。

但是，受到自然灾害，国家政策和生活样式的变化等的影响，祭祀内容的大部分都

已经有所变化。本文通过从1957年到2017年的田野调查的结果，以及与相关的先行研究的比较，将对与论岛这60年间的祭祀内容的变迁进行考察研究。

はじめに

与論島は、九州の南端佐多岬から台湾までの、およそ1200kmに連なる島々の中央に位置し、周囲24km、標高97m、人口5267人⁽¹⁾の、裾礁のリーフに囲まれた平坦な島である。

島名を示す最も古いとされる文書は、1424年から1867年の443年間にわたる琉球王府と中国との外交記録を中心とした公文書『歴代宝案』である。その1431年に「琉球の海上の小島の由魯奴」とある。「由魯奴」は現在もひんぱんに呼称されている与論島の古名「ゆんぬ」の漢字表記とされる。

また1471年に、朝鮮王の命に奉じた申叔舟「琉球國之図」（『海東諸国紀』）には、「與論島」と明記され、「去度九55里去琉球15里（度九〔徳之島〕から55里琉球から15里）」と、ほぼ正確な航路が示される。さらに、琉球王府編纂の『おもろさうし』全32巻（1531年～1623年）にも、「かゑふた」「よろん」と謡われている。しかし与論島は、1609年の島津氏の琉球侵攻により薩摩に割譲される。沖縄の文化を根底に持ちながら、しだいに薩摩、すなわちヤマト文化の影響を受けていった。

「シニユグ（シニグ）⁽²⁾」は、沖縄の北部国頭半島およびその周辺離島でも行われている農耕儀礼である。「シニユグ」に類推される祭りは、1713年琉球王府編纂の『琉球国由来記』の年中祭祀に「シノゴ折目」と称して、辺戸村、奥村、安波村、安田村、伊江島、伊平屋島に記録されている。記録された地域が少ないことについて伊波普猷は「当時の女歌人恩納なべの生娘時代の歌⁽³⁾」を見ても明らかである如く、お上から淫祠として禁止されたので、由来記の資料を提出した時、その地頭達が特に遠慮して、削除したとしか思われぬ」と述べる⁽⁴⁾。

祭りの起源は沖永良部島の世の主誕生時の伝承⁽⁵⁾からもうかがえるように、13世紀以前に遡るとされていたものの、明治維新の改革を積極的に推進していた薩摩藩では徹底した禁止令が敷かれた。沖永良部島では、1870（明治3）年を最後に廃止されている。

与論島では1871（明治4）年、ウンジャン祭りとともに、明治政府の神仏判然

令により廃止された。しかし、十数年後から、未曾有の旱魃、暴風、疫病、火事が相次いで繰り返し起こり、シニユグ祭りを行っていない祟りであるとの島民の畏怖により、1899（明治32）年⁽⁶⁾に復活された経緯がある。

与論島の「シニユグ」が初めて調査されたのは、戦後の米国統治下から祖国復帰した半年後の、1954年5月および1957年に、九学会連合から訪れた大山彦一による。大山は1960年に『南西諸島の家族制度の研究マキ・ハラの調査』を刊行、「第2編 奄美大島与論島ハラの研究」として、192頁にわたる詳細な記録を残した。それをきっかけとするように、島内に「島の文化を掘り起こしアイデンティティーを見出そう」とする気運が生まれ、自費出版による研究記録が相次いだ。さらには島外からも多くの研究者が訪れ、優れた論考が残された。

しかし現在、祭りは衰退の一途にある。1960年代に25の「サアクラ⁽⁷⁾」で行われ、島民の半数が参加していた祭りは、2017年には11のサアクラとなり、参加者は人口の1割に満たない。衰退の第一の要因は、1963年の製糖工場操業に始まる稲作からサトウキビ農業への転換、第二は1965年の水道施設の普及に代表される生活様式の近代化、第三は与論島方言の消滅化であろう。しかし与論島の「シニユグ」は、祭祀集団「サアクラ」ごとの、「神道(カミミチ)」と「斎舎(サアクラ)」と「構成員」をたどれば、隆起珊瑚礁から成る無人島であった与論島の島建てがわかるとされる。たとえば、本論の調査地である「ニッチェーサアクラ」に二年に一度集まる人々は、現在どこに住んでようと、島に上陸した始祖が初めて居住したのが「ニッチェー」であったと信じている。

時代の変遷と共に、祭りの儀礼や意味もあいまいになりつつある。本稿では、与論島のシニユグ祭りが初めて調査された1957（昭和32）年から60年を経て、2015（平成27）年および2017（平成29）年の祭りの儀礼や所作がどのように変化したかについて、与論島のシニユグ祭り最大の祭祀集団である「ニッチェーサアクラ」を中心に検証していく。

一、祭りの概要

祭りは2年に1度、旧暦7月16日から2日～4日間行われ、豊作祈願を主に災厄祓いを兼ねた祭りとされる。祭祀集団「サアクラ」は、血縁関係に限らず共に渡島してきた一団と考えられている。明治初年までは30か所程のサアクラが

あったことが知られ、祭りの夕刻には全島で一斉に太鼓、歌、三線が鳴り響き、賑わいを競ったと伝わる。

祭りは男の祭りとされ、女性は料理に関わることで、および祭りの夕刻に行われる直会への参加に限られた。古くは、1週間匂うものを食べていない生娘に、水に浸しておいた生米を噛ませて醸す「噛み酒」を醸造していたと伝わる⁽⁸⁾。「禁忌⁽⁹⁾」が厳しく、「自分の関係しないサアクラへは決して足を踏み入れてはならない」とされているものの、大山彦一(1960)や山田実(1988)などの調査からわかるように、祭りの構成にはほとんど差がない。

祭りの初日旧暦7月16日は、翌日の本祭りのための準備をする。渡島してきた、始祖が通った経路とされる「神道」^{かみみち}を整備し、斎舎「サアクラ」を建て、シニグ旗や弓矢や神酒の準備をする。

二日目の本祭りの昼過ぎ、シニグ年の年初から禁忌を守ってきたサアクラの人々が集まる。祭りの次第はおよそつぎの通りである。

- 1.「東の柱」や「根石」、「イビ」などの前に供物を捧げる
- 2.各々のサアクラでユングトゥ(寿詞)奏上
- 3.神酒の供食
- 4.高台のパンタでの神迎え
- 5.合同祭
- 6.本祭りのユングトゥ(寿詞)奏上
- 7.家打ち祓え^{ヤアウチバレイエ}
- 8.弓矢儀礼
- 9.一重一瓶(我が家の一品料理と神酒1瓶)の交換会食
- 10.歌舞の奉納
- 11.神送り

三日目は夕方から、太鼓・歌・三線の直会が行われる。近年はこの日にサアクラを片付けるところが多い。

四日目は、サアクラを片付け、歌舞の直会を行う。

本稿で検証する1957年から2017年までの60年間は、政治的に安定し、経済と情報の発展が目覚ましい年間であったといえよう。先行研究者の写真記録と現在の記録をもとに考察を進める。比較で使用する写真はつぎの通りである。

(1)大山彦一「シニグの見学」『南西諸島の家族制度の研究』関書院1960

撮影年月日：1957年旧暦7月17日（新暦8月12日）

(2)小野重朗「与論島のシヌグとウンジャミ」『奄美民俗文化の研究』法政大学出版局1982 撮影年月日：1969年旧暦7月17日（新暦8月29日）

(3)下野敏見「与論島のシニグ祭り」『奄美諸島の民俗文化誌』南方新社2013
撮影年月日：2005年旧暦7月17日（新暦8月21日）

(4)源 園江「シニユグ祭りの記録」『与論町誌追録版』与論町教育委員会2018
撮影年月日：2015年旧暦7月17日（新暦8月30日）

(5)源 園生

撮影年月日：2017年旧暦7月17日（新暦9月7日）

二、サアクラの変化

①1969年7月17日 新暦8/29（金）

②2017年7月17日 新暦9/7（木）



「ニッチェー」は「根の人」の意。「東の柱」にシニユグ旗を立て根付の稲穂を結び、神酒を供える。サアクラに向かって左は神送りのムイ（盛・森）、裾野に湧水がある。

斎舎「サアクラ」は湧水地に隣接し、本祭りの前日に建てられ、最終日に取り壊される。1960年代までは、四角に竹や自然木で柱を立て、天蓋を蓆やクバの葉で覆い、壁はなく、床に蓆を敷き座していた。ニッチェーでは「東の柱」にシニユグ旗や根付の稲穂を結び、白神酒黒神酒を供え、柱に向かって拝礼する。

表1. サアクラの変化

撮影年月日 調査項目	1969/7/17 〔新暦 8/29 (金)〕	2017/7/17〔新暦 9/7 (木)〕	
		変化あり	変化なし
サアクラ (斎舎)	柱：自然木 天蓋：蕨とクバの葉	柱：鉄柱、 天蓋：ビニールシート	前日に建てられ、最終日に取 り壊される
シニグ旗	前日に竹葉と晒布で製作	旗頭の両端を切揃える	前日に竹葉と晒布で作成
稲 穂	座元の稲穂を東の柱に結ぶ	氏子の初穂・島内でも希少	根付の稲穂を東の柱に結ぶ
白 神 酒	各戸持ち寄りの新米で醸造 東の柱の根元の甕の中	市販の米粉 1 kg を 20 ℓ の水で 溶きボリバケツで水で冷やす。	子供を含め全員が供食
黒 神 酒	黒糖焼酎、戦前は自家製	全戸 1 瓶持ち寄りが廃止	島産黒糖焼酎座元供出
参加世帯数	117 戸 (全島世帯数 1640 ⁽¹⁰⁾)	30 戸 (全島世帯数 2582 ⁽¹¹⁾)	
座元装束	白帕・白神衣	金帕・白上衣水色袴の神職衣	琉球風の帕
寿詞・誦詞	与論方言	祓詞の奏上・方言共通語半々	「ゆがぶう」など主要語は方言

稲穂は本来は座元の家の初穂であったが、現在はサアクラで唯一稲作を行っている家から供えられている。ニッチェーサアクラは島内最大のシニユグ祭祀集団であり、1972年には117戸であったが(野口才蔵1972、110頁)、2015年の参加者は30世帯であった。

ニッチェーサアクラでは2015年に、65歳の父から29歳の長男大幸氏へ座元が継承された。大幸氏は1か月前まで東京都文京区の根津神社で奉職していた神社本庁の資格を持つ神職であり、また、与論方言を話さない世代でもある。世代交代であると同時に、文化の転換期ともいえる象徴的な出来事といえよう。

座元大幸氏は、祭りの初めに「掛けまくも畏き伊邪那岐の大神 筑紫の日向の…」に始まる神社神道における祓詞を奏上した。東の柱の根元に神酒を捧げ、続けてニッチェーサアクラ同族のみの祭りの寿詞が、共通語と与論方言半々で奏上された。その中に、ニッチェーで生まれ、琉球軍と戦った歴史上の英雄とされる「アジニッチェー」「インジュルギ」がシニユグ神につぐ「神」となって奏された。この寿詞の原型は、大幸氏の曾祖父、市来加平氏(1898－1984)によって作成されたものとのことである。加平氏は、妻の兄で正式な神職であった大野上藏氏からの教示を受けており、1957年調査の大山(1960)においては、古形の与論方言でありつつも、口誦で継承されてきたユングトゥ(寿詞)を奉書をもって奏上している。ユングトゥ(寿詞)の内容については稿を改めて考察する。

三、「家打ち祓え」の儀礼

③1957年7月17日 新暦8/12 (月)



④2015年7月17日 新暦8/30 (日)



- ③白ハチマキに白シャツ正装の男子が「フーヴェーハーペー」と左回りに3度打ち祓う。
④少子化により高校生も参加、普段着のTシャツであるが祓いの方式は変わっていない。
座元と旗持を祓い、全氏子の家を打ち祓い回る。

表2. 家打ち祓え「フーヴェーハーペー」

撮影年月日 調査項目	1957/7/17 〔新暦8/12 (月)〕	2015/7/17〔新暦8/30 (日)〕	
		変化あり	変化なし
子供達の装束	白いシャツ 白ハチマキを後頭で垂らす	日常のTシャツ	
子供達の年齢	小学生以下の男の子	少子化により高校生以下の男子	男の子のみ
9月平日の祭	学校から急いで帰宅後行う	大人の男性が代行する	
唱えの言葉	フーヴェーハーペー		フーヴェーハーペー
構成員宅で供え られ戴くもの	新米のおにぎりと神酒	500円の封入袋 市販のお菓子や飲料	

シニユグ祭りにおいて、「家打ち祓え」を行う男子は、この祭儀の司祭者となっている。サアクラの家の子なら誰でもなれるが、大人からも礼節の言葉と態度をもって接せられる。「デーク（蔭竹）」というイネ科の多年草三本を一束に結わえ、サアクラの家々を時計と反対回りの左回りに三回打ち祓う。「祓え」の言葉はサアクラによって少し異なるが、「フーヴェーハーペー」の語が必ず唱えられ、「神前」「家の中柱」「家の中全体」「屋外全体」のいずれか、または組み合わせて行われる。城地区の「クチピーヤサアクラ」では、2017年は9月の平日であったため座元を含む成人男性3人で行い、どしゃ降りの雨に臆することなく、裸足で庭から

家に上がり、畳を踏み神前を通り、三度左回りに打ち祓われた。

全島では構成員が10世帯に満たないサアクラも複数あり、さらに少子高齢化により男子三人一組を原則としていた「家打ち祓え」が困難になりつつある。また、女の子で参加を希望する子供もあり、今後の課題となっている。

四、ヲウドウイ（踊り）と合同祭場の变化

⑤1969年7月17日 新暦8/29（金）

⑥2015年7月17日 新暦8/30（日）



- ⑤は左から「ブカナサアクラ」「ニッチェーサアクラ」「サトウメシ（スーマ¹）サアクラ」の三人の座元による「雨賜うり」の神舞。
④は座元母による祝舞「かぎやで風」。

表3. ヲウドウイ（踊り） 一舞を奉る一

撮影年月日 調査項目	1969/7/17 〔新暦8/29（金）〕	2015/7/17〔新暦8/30（日）〕	
		変化あり	変化なし
神舞い	合同祭場において三人の座元が島民最大の願い「雨賜うり」を謡い踊る	沖縄舞踊「かぎやで風」を座元の母が踊る	厳かな神舞を奉る
楽曲の担い手	祭場主サトウメシサアクラの役割として太鼓三線が鳴り響く	三線の芸能者が途絶え、ニッチェーサアクラ座元であった加平氏（故人）の録音テープが流れた	
湧水「ウッコウ」	「ウッコウ」は「大井戸・御井戸」の意。祭場の脇に、干ばつでも涸れない井戸がある	1972年に家庭に水道施設が普及し、ウッコウの井戸は農業用水施設となった	湧水場所は特定されている

大きな変化のポイントはつぎの四点である。

(1) 神舞が、座元男性から女性に変わった。

シニユグは男の祭りで、祭り前日の「神道先祓い」や「家打ち祓え」など「男」で

なければならなかった。女性は「一重一瓶」の料理を用意し直会へ参加するものの、あくまでも控え目でなければならず、前面に出ることはタブーであった。したがって、祭りの中座で女性が単独で踊ることは、一つの大きな転換を意味するといえよう。

(2) 奉納の歌舞が雨乞祈願「雨賜うり」から祝舞「かぎやで風」になった。

^{アミタボ}雨賜うり ^{タボ}賜うり 島がぶどう ゆがぶう

(雨を賜われ 賜われ 島の富こそ 世の富)

与論島は隆起珊瑚礁から成る平坦な小さな島で、川がなく、旱ばつに悩まされ、深い井戸を掘削する技術の無かった江戸期以前には餓死の伝承もある。200名近いサアクラの人々が見守る田園の神田で、太鼓・歌・三線が鳴り響き、三人の座元がただ掌を天に掲げては地に流す「雨賜うり」は、生死をかけた祈りだったのである。

1965(昭和40)年には水道施設が全島に普及し、水道の蛇口をひねればふんだんに真水があふれ出るようになった。2005年のウッコウにおける合同祭の記録には「特に古典的な芸能はなかったが、一つ注目されるのは〔雨賜うれ〕の歌と舞があった」(下野敏見、2013)と記されている。

2015年のシニユグ祭りに奉納された舞は、故市来加平氏の歌三線が録音テープで流れ、座元大幸氏の母によって根石に向かい琉球の伝統的な祝舞「かぎやで風」が奉舞された。

歌詞は「今日の嬉しさは直り座なればこそ 蕾居る花の 露に当たる如く」と訳する。「かぎやで風」は^{ブウ}「御前風」は^{グジンブウ}とも呼ばれ、重要な祝い事の最初に舞われる祝舞である。

(3) 座元の装束の変遷

1957年時の三人の座元は先代から継承されてきた琉球風^{ハチマチ} 帋を冠し、プカナは茶、ニツチエーは白、サトゥヌシは赤であった。また着物は、プカナは黒系、ニツチエーは白衣、サトゥヌシも白衣である。この装束には時代の変遷がみられる。その具体例の一つは、ニツチエーの^{ハチマチ} 帋である。1957年調査の大山彦一(1960、227)には、白帋に白衣のニツチエーサアクラ座元市来加平氏の写真と説明が掲載されている。しかし、モノクロの写真で色を確定するのは難しいものの、1969年調査の小野重朗(1982、306)では、「座元の服装は晴れ着の上にカミギン(神衣)、スーギン(素衣⁽¹²⁾)と呼ぶ広袖の白衣を重ねて着け、頭にはハチマ

キというターバン風の冠の黄色のものを被っている」と記している。いぶし金となったこの帋は、2015年に座元を継承したひ孫の大幸氏に受け継がれている。白から黄に変わったいきさつを大幸氏に尋ねると、種子島の大叔母なら知っているかもしれないと、その場で電話をかけられた。加平氏の二女しず子さんで、大幸氏の祖母の妹にあたるという。電話を変わっていただき尋ねると、「あれは私が作ったのよ」と嬉しそうに答えられた。洋裁学校に通われていたしず子さんは、帋が古ぼけていたために、金地の新しい布で丹精を込めて作られたとのことであった。

一方、サトゥヌシサアクラの帋の「赤」は一貫している⁽¹³⁾。しかし、神衣の色には変化があるようだ。サトゥヌシサアクラでは、座元は「スーマイキー（スーマ血統）」と呼ぶ一族の中で座元を交代しているが、1969年調査の小野（1982）では、その年の座元も他の座元も白衣である。ところが平敷令治（1995、51）では「礼儀を表す意味で着物をつけ、その色は黒系」と述べて座元の写真が掲載されている。これらの事から推察できるのは、ある時期に、サアクラごとに帋と装束の色が決められていたものの、その後流動的になっていったと考えられる。ただし、できるだけもとの姿を維持する努力と観念から、「帋」と「着物」が継続されていると考察される。

2015年および2017年の装束は、ニツチェー座元はいぶし金の帋に白上衣と水色袴と白足袋、サトゥヌシサアクラ座元は赤の帋に紺の着物と白足袋であった。

(4) 祭場は座元の苗代田から町営のゲートボール場の一角となった。

祭場は1960年代までサトゥヌシサアクラ座元の苗代で「シニユグダー」と呼ばれた。稻田の広がる田園の小高い丘にあり、その脇の1～2 m程下方に、早魃でも涸れない湧水「ウッコウ（御井戸・大井戸）」があった。1963（昭和38）年製糖工場の操業により、早魃、暴風に左右されにくいサトウキビ農業へと転換、その作業や搬出の機械化効率に向けて大規模な土地改良事業が行われ、一帯がサトウキビ畑となった。祭場の苗代田を含めてゲートボール場が造成され、田の西の畦にあった根石を北方の入口近くに移した。その脇の下方には湧水「ウッコウ」が、コンクリート造りの農業用水施設となっている。

五、弓矢の儀礼

⑦1969年7月17日 新暦8/29 (金)

⑧2015年7月17日 新暦8/30 (日)



- ⑦1960年代までは祭場の東の角に一束の稲を刈り残して、的を置き三人の座元が順に射って、当たれば翌年は豊穡であると占っていた。
- ⑧祭場入口で座元の代表が射る。

表4. 弓矢の儀礼

撮影年月日 調査項目	1969/7/17 〔新暦8/29 (金)〕	2015/7/17〔新暦8/30 (日)〕	
		変化あり	変化なし
弓矢作成	ブカナサアクラ座元により青竹で作成されていた。	2000年頃にブカナが不参加となる。2015年にニッチェーサアクラが作成を引き受け、儀礼が復活。	作成に際し、ブカナサアクラ座元からの伝授を受けた。
弓矢儀礼	稲に見立てた草に的を置き、三人の座元が交互に弓射る。	祭場入口で、ニッチェーサアクラ座元が弓射る。	
合同祭	「ニッチェー」→シニグ旗、「ブカナ」→弓矢、「サトゥヌシ」→太鼓歌三線の役割があり、200名近い合同祭で賑わった。	2000年頃から「ニッチェーサアクラ」と「サトゥヌシサアクラ」のみで合同祭を行うようになった。	弓矢の儀礼が復活したことにより、祭りの一連の構成は60年前とほぼ同様となった。

ウッコウで合同祭を行っていた三つのサアクラは、それぞれに役割を担っていた。弓矢の製作を担っていたブカナサアクラが2000年ごろから参加しなくなり途絶えていたのを、2015年にニッチェーの長老がブカナ座元からの伝授を受け、復活させた。しかし、儀礼の意味や所作はあいまいなものとなり、一座元のみの弓射りとなったり、サアクラの土地を象徴する場所が不確かだったりと錯誤が生じた。だが、儀礼の形式を復活させたことにより、今後修正され、あるいは新しい意味付けがなされていくことも考えられよう。

六、男の祭りから女性参加の祭りへ

⑨2005年7月17日 新暦8/21（日）

⑩2015年7月17日 新暦8/30（日）



⑨女性を忌むシニユグ祭りで、祝女（ノロ）として座元を代行した時さん。

⑩神送りのクボザトゥムイ（久保里森・盛）へ一般女性が初めて登拝した。

表5. 男の祭りから女性参加の祭りへ

撮影年月日 調査項目	2005/7/17〔新暦8/21（日）〕	2015/7/17〔新暦8/30（日）〕	
		変化あり	変化なし
座元継承	1980年代に男子のない加平氏は孫に座元を継承、娘の時さんがノロとして代行した。	2015年に父盛廣氏から長男大幸氏へ座元を継承。	座元は一貫して男子に引き継がれたことになる。
かみみち 神道先祓い	女性は原則として料理関係以外関わらない。	前日の神道先祓い（清掃）に女性も関わるようになった。	始祖が辿ったとされる神道（カミミチ）を清掃し浄める。
神送り	クボザトゥの神送りのムイ（森・盛）に、時さんが座元代行のノロとして登拝した。	神送りのムイに、一般女性が複数人登拝。	

シニユグ祭りは男の祭りである。禁忌が厳しく守らなければ崇められると恐れられていた。主なものに「死・血・争・火・穢」があり、女性は極力かかわってはならないとされていた。女性は料理に関することおよび夕刻の直会への参加以外はタブーであった。そのような中で、1960年代から1970年代にかけて、ニツチエサアクラの座元の継承がどうなされるのかは島内の一つの関心事でもあったようで、野口（1972）の中で「娘の時さんか孫の盛廣氏になるか」と触れられている。実際に行われたのは、孫の盛廣氏を座元とし、娘の時さんをノロとして代行させるという方法であった。それが受け入れられた背景には、城地区から移転して成立したと伝わる「ハニクサアクラ」において、ノロが座元の次席に就いて

祭りの始終に関わっていたことがあったと考察される。

本祭りの夕刻、神送りをするのも古来は男性のみであった。2015年はウッコウでの弓矢儀礼の流れで、神送りの森「クブザトゥムイ（久保里森・盛）」へ女性たちも同行した。ムイへ登る手前で、年配の女性複数人が立ち止まり「ああ残念、男だったら登って行くのに」とつぶやいた。若い女性が「いいんじゃないの、大丈夫よ」と言う。長老の一人が「いいよ、いらっしゃい」と告げ、「えっ、いいの!？」と驚きの声があがる。この瞬間、ニツチャーサアクラとサトゥヌシサアクラの合同祭の神送りにおいて、一般女性が神送りの森に初めて登拝することになった。

おわりに

祭りは変遷する。どれほど注意深く継承されているように見えようとも、人々の生活と感性が変化していく以上、避けられない。シニユグ祭り衰退の第一の原因は、稲作が行われなくなったこと、第二は生活様式の変化すなわち都会の情報と様式がリアルタイムに受容できるようになったこと、第三には方言が使われなくなったことであろう。しかし、シニユグ祭りは与論島の島建ての在り方を内包していると見られ、祭りを失うことは島のアイデンティティーそのものを見失うことにもなりかねないといえる。

1960年の与論島の中学生は、全島で1学年250名ほどであったが2017年は50名に満たない。その中で2000年以来、公立の中高一貫校として、情報教育などを先駆ける試みがとられてきた。また、近年における幼児教育は公立とともにキリスト教系の私立にも関心が高まっている。いっぽうでは、島の文化を掘り起こす教育も盛んに取り組まれている。

大山彦一や小野重朗を初め、多くの研究者がシニユグ祭りを調査し記録に残したことは、与論島の民俗文化研究に大きく影響を与え、成果を残してきた。

祭りの儀礼の分析は、その背景にある個々の人々の胸の内を踏まえてはじめて、より精緻な考察が成り立つといえよう。すなわち、その地に住む人々の生活の中にこそ、より真実があると考察する。また民俗学は、研究者個人や図書館の中に収められているだけのものではなく、その地に生活する人々に知られ、還元され、活用されるべきものではなかろうか。とはいえ、この問題は危うさをも孕

んでいる。2015年ニッチェーサアクラのシニユグ祭りの四日目の直会における「旗持」の「与論献奉⁽¹⁴⁾」の口上は次のようであった。

島外の多くの研究者が、ニッチェーのシニグを研究しているという事はあるがたいことで、自分自身がもっともっと勉強して大事にし、子供たちに伝えていかなければならないと思う。いっぽう、外部からの視線を意識しすぎて惑わされないように、自分たちが受け継いできた、昔ながらのものを肅々と続けていくことが大事だと思う。

急速に衰退していく祭りの存続に、人々は大きな危機感を抱いている。その方策の一つに、「観光資源」としての文化遺産保護を目指す方法もあるが、ニッチェーサアクラは、その神観念を「今在る人々の胸の内に合わせた」と言えるのではないか。シニユグ祭り寿詞において、シニユグ神の下に「アジニッチェー」「インジュルギ」の神を加えたことにより子供たちに受け入れられ、次世代に引き継がれる道標が据えられたものと考察する。そして同様に、「装束」や「祭場」や「弓矢儀礼」や「踊り」や「女性参加」も、時代の変遷とともに、今在る人々の生活と心情とに沿って変遷し、祭りは続けられていくのであろう。

しかし、シニユグ祭りの原姿の祈りは変遷の中に息づき、根底を流れ続けていると考察する。始祖が辿ったとされる神道カミミチを浄め、湧水の地に齊舎サアクラを建てて寿ぎ、家と土地を祓い、歌舞を奏し、海の彼方へ神を送る。畏怖と希望のうちに忌籠ってきた年の折目に、五穀の初を供えて奉るシニユグ祭りは、南西諸島全域に広がる「若水」、すなわち始原世界への回帰の祭りであろうと考察する。

注

- (1) 2018年12月末人口5267人・世帯数2604(与論町役場広報)/1960年人口7792人・世帯数1635(国勢調査)
- (2) 与論島で1960年代以前に出生した世代の文献や口誦の多くは「シニユグ」と呼称されているが、本稿の調査地である「ニッチェーサアクラ」のほとんどの氏子および山田実(1988、1121-1141)では「シニグ」としている。本稿では原則として「シニユグ」を用いるが状況により「シニグ」、その他の呼称をも用いる。
- (3) 「ゆ(良)かていさみ姉ベ シヌグしちあし(遊)でい、わすた(私達)世になりば、うと(御止)みさりてい」のうたがある。
- (4) 伊波普猷「南島の稲作行事について」『をなり神の島1』(1973初・1981、306)平凡社

- (5) 島伊名重「維新前に於ける本島城籠^{シニグ}祭りの内容」『沖永良部島』(1956初・1968,109) 分娩時にシニグ祭中であったため禁忌に当たるとして宿が借りられなかったと伝承する。
- (6) 『与論町誌』(1988)の巻末年表及び、栄喜久元(1964、232)
- (7) 祭りの斎舎を「サアクラ」と言いその構成集団をも地名を冠して「〇〇サアクラ」と呼ぶ。
- (8) 与論島では明治期には途絶たようだが、国頭村安田村では戦後まもなくまで、「実際に醸した」との証言(2016年8月聴取)がある。
- (9) 主な禁忌は「死・血・争・汚(穢)・火」があり、遵守が祭りへの参加資格といえる。
- (10) 与論町町政要覧「国勢調査」
- (11) 与論町広報2017年7月末
- (12) 与論島方言では白を「スー」と言い、スーギンは「白衣」すなわち「白い神衣」のことを言う。したがって「スーギン(素衣)」としているのは誤りであろう。下野(2013、79)は、小野(1982、306)に準じたものと推察する。
- (13) 村落調査サークル「文化人類学研究会会報vol.7」(1973、64) 南山大学に「サトゥヌシは赤(紺とも)のハチマキをかぶる」とある「紺」は、着物の色の間違いであろう。
- (14) 客人を歓迎しお酒を勧める儀礼で、杯と神酒を掲げて口上を述べ、一人一人に酒をついで、同席の全員に回していく。

参考文献

- 大山彦一 1960年「シニグへの参加」『南西諸島の家族制度の研究マキ・ハラの調査』関書院
- 小野重朗 1982年『奄美民俗文化の研究』法政大学出版局
- 栄喜久元 1964年『与論島の民俗』自費出版
- 下野敏見 2013年「与論島のシニグ祭り」『奄美諸島の民俗文化誌』南方新社
- 野口才蔵 1972年『南島与論島の民俗』自費出版
- 平敷令治編 1995年「与論島のシニグ」沖縄国際大学
- 源 園江 2018年「シニグ祭りの記録」『与論町誌追録版』2018 与論町教育委員会
- 山田実 1988年「シニグ」『与論町誌』与論町教育委員会